

曾祖父と献眼

市島中学校 三年 林 慶樹

父の祖父、つまり私には曾祖父で戦争体験者です。日中戦争で敵弾に首を撃ち抜かれ九死に一生を得て復員しました。幼い頃から戦争の話を知り、遊んでもらい随分可愛がってもらいました。その曾祖父が昨年十二月九十九才で亡くなりました。曾祖父は、「戦死した人が沢山いるのに、こうして運良く助かった命、誰かの役に立ちたい。」と常に言っていました。そこで献眼をと願ったのだそうです。私が生まれる前から、大阪アイバンクに眼球提供登録をし、後に平成五年六月一日兵庫アイバンクが大阪アイバンクから分離独立したので兵庫アイバンクに変わりました。私に「目の見えない人が少しでも見えるようになったら、どれだけ嬉しいやろうな。」と曾祖父が話してくれていたことを思い出します。アイバンクの登録カードはいつも冷蔵庫に貼ってありました。私はまさかそんな事が出来るのかと疑問を抱いていましたが現実になった事に驚きました。

曾祖父が亡くなった時の事です。曾祖父の願いとは言え、家族は遺体を傷つける事になるし、献眼を嫌がる者もいました。しかし、祖母が「生前から言い続けていた事だし、ここで辞めたら父が悲しむかも」と言いました。そんなこともあり兵庫アイバンクに献眼を申し出ました。曾祖父が九十九才と言う事、過去に白内障の手術を行っている事を告げましたが、角膜の状態は年齢に関係ないと言われました。過去には百二才の方もあったようです。申し出てから約一時間半後に、神戸アイバンクから、移植コーディネーターの方と眼科医の方が来られました。眼科疾患の病歴等の聞き取り調査の上、摘出承諾書にサインし曾祖父が寝かされている所で眼球摘出手術が行われました。摘出後は義眼を入れてもらったため、手術前と変わらず、あの優しい曾祖父の顔でした。

数日後、兵庫アイバンクの方から連絡が入り、曾祖父が提供した角膜が二人の方の移植手術で使われたと聞きました。「命のリレー」のバトンを目の不自由な方に渡せた！！天国へ行った曾祖父はどれだけ喜んでる事でしょう。曾祖父の角膜がこのどこかで生き続けていると思った時、私は胸が熱くなりました。

死んでからも人の役に立ちたいと願った曾祖父。何十年前から献眼をする心を決めていた曾祖父。その思いを死ぬ直前まで言い続け、強い意志を持った曾祖父だと思いました。誰も目的を持つが途中で揺らぐ事もあります。それを全うした曾祖父が、素晴らしく誇りに思いました。それというのも、私達が経験もした事もない戦争が根底にあったのではないだろうか、死ぬか生きるかの戦地で、戦友が大勢亡くなり、自分も撃たれ一年近く入院する大けがを負いながら助かった命、誰かを助けたいと強い気持ちがあったのだらうと思いました。

後に、兵庫アイバンクの方から聞いた話によると、現在の医学では、IPS細胞を使った再生医学の研究が盛んだが、段階があり、一層、二層、…と、まだ先の未来らしく、現在も角膜移植が標準治療だそうです。すぐにでも手術を、と待つ患者さんが、県内に常時百三十人から百四十人おられるのに対し、昨年度の提供者は十六人とどまった事を聞きました。

医療が進歩し高い技術があっても、提供者が乏しいため、移植が進んでいない現実に気づかされました。

これからは、目の不自由な方のために、一人でも多くの方が、アイバンクに登録されたらいいと思います。